対談 特別企画

「食」と「文化」の融合

遠藤食品株式会社の遠藤栄一社長と栃木県佐野市出身で画家の安藤勇寿氏に対談していただき、「食と文化の融合」をテーマに地域貢献に対する考えや漬物の役目について話を伺った。

（千葉友寛）

◇　◇

見る人自由に感じて
佐野に愛される企業目指す

安藤勇寿「少年の日」美術館
代表・画家 **安藤　勇寿氏**

遠藤食品株式会社
代表取締役社長 **遠藤　栄一氏**

――2人の出会いは。

安藤氏「遠藤会長との縁で遠藤食品さんの会社によく訪問していたので自然に会っていた感じです。私は遠藤会長の考え方や生き方を尊敬していて、遠藤社長と話をするようになってから感じたことですが、父譲りものがあってとても話しやすい方です」

遠藤社長「安藤先生はシリーズ500万部を販売した絵本『佐賀のがばいばあちゃん』の絵を描いた画家で、このような素晴らしい芸術家の方が佐野市にいるということは誇りです。安藤先生とお話しをするようになって、地元の著名な文化人である安藤先生とタッグを組めば良いものが生み出せるのではと考え、先生に生姜の絵をお願いしたところ快く引き受けてくださり、『生姜ダクワーズ』と『国内産生姜シロップ』に使用させていただいています。安藤先生が書かれた生姜は新鮮で瑞々しく、温かみのある雰囲気を表現されています。弊社も佐野で頑張っている企業なので、安藤先生とのコラボをはじめ、地元の企業や名士の方と協力しあいながら地域の活性化につなげていきたいと考えています」

――地域貢献について。

安藤氏「地元の役に立つことをしたいと思っていて、16年前に色々な方との出会いや協力があって地元のこの地に『少年の日』美術館を開館しました。世の中では機械化も進んでいますが、最終的に物事を判断したり決断するのは人です。そこには感情や感性もあると思いますが、自分に信頼を置いてくれる人と一緒に取り組んだ仕事は自信を持って進めることができると思います。遠藤食品さんは遠藤会長の意思を受け継いだ遠藤社長が会社の姿勢をしっかりと表現しながら立派な製品を作っている。信用や信頼は長い時間をかけて築くものですが、遠藤食品さんにはそれがしっかりとあると思います」

遠藤社長「弊社の従業員は90%地元の出身で、地元に愛される企業を目指しています。漬物は日本食に欠かせないもので、昔から日本人の食を支えてきました。絵も色々とありますが、安藤先生の絵は色鉛筆で描かれたもので、温かさと懐かしさを感じるものばかりで心を癒してくれます。安藤先生とのコラボはまさに食と文化の融合で、佐野市の魅力を広く発信できるものだと思っています」

――絵を通じて伝えたいことは。

安藤氏「絵でこういったことを伝えたい、ということではなく、見た人が自由に感じてほしいと思っている。私が絵の説明をした場合、自分が感じたことと違っているという間違った認識になってしまいます。絵の中の少年は私を描いているのですが、その少年を自分と照らし合わせて何かを感じていただければ嬉しいです。その感じたことというのは人それぞれで、正解はありません。そういった意味では絵と食は共通しているのではないでしょうか。漬物が食卓にあるということは家族の輪がそこにあるということで、そういった意味では漬物の役目は大きいです。若い人に遠藤食品さんの商品をはじめ漬物の味を知っていただきたいですし、漬物を食べるようになれば米の消費も増えます。米の美味しさの引き立て役として漬物以上の存在はないと思います。これからも安全安心で美味しい漬物を作っていただきたいと思います」